言語連想における時代的変化の検討（２）
── 小・中学生の反応語の分類と分析 ──

子ども学部　荻野　七重（共同研究者　小杉　洋子　聖徳大学）

荻野と小杉は，これまで 2006 年度から４年間に渡り，幼児および小・中学生の言語連想の実験と分析のための研究助成を受けてきた。これらの研究は，ほぼ 30 年の時代の経過によって，子どもの言語にどのような変化が生じているかを検討することを目的としたものである。荻野と小杉は，2007 年に，幼稚園児および保育園児を対象として言語連想の実験を行い，2008 年には小・中学生を対象として同様の言語連想実験を行った。これは，1974 年に幼稚園児を対象に行った連想実験と 1977 年に小・中学生を対象に行った連想実験を踏まえ，それとの比較を目的として行ったものである。言語の基本構造の大きな変化が生ずるとは考えられないとしても，この 30 年間の子どもを取りまく言語環境の変化は大きく，社会的環境の変化，とりわけマスコミニュケーションの変化と拡大は，子どもの言語環境に直接的，間接的に何らかの影響を与えていると考えられる。連想法は，概念を調べる方法の一つでもある。時代背景の変化は，連想反応の変化として現れることが予想され，したがって反応語の検討を通して，そこに概念の変化を読みとることができると考えられる。ほぼ 30 年を経て行った今回の幼児，小・中学生の実験結果を，以前に行ったものと比較することは，このように時代間の言語の構造的変化の有無だけではなく，連想反応語を通して得られる言葉の意味（概念）の変化をも見ることができると考えられる。

荻野と小杉は，前述のような観点から，2008 年 2 月から 3 月にかけて，小学校１年から 6 年および中学校 2 年の 7 学年，約 2100 名の生徒を対象として言語連想実験を行った。この実験結果は，二つに分け，名詞（37 語）を刺激語とした反応語についての分類を 2008 年度に行い，動詞（26 語）および形容詞（30 語）を刺激語とした反応語分類後に残した。

2009 年度は，全刺激語 93 語の内，残された動詞 26 語と形容詞 30 語に対する反応語の分類を行った。これまでと同様，分類は学年別に行い，それぞれの刺激語に対する反応語の種類とその出現率を求めた。その結果は，[資料]「小・中学生の学年別連想反応表（2008）その 2：動詞および形容詞に対する反応語」として，本学紀要第 46 号に掲載した。